



Title	中国語を母語とする学習者の日本語談話におけるフィ ラー学習環境による運用上の違いを中心にー
Author(s)	冷, 羽涵
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (冷 羽 涵)	
論文題名	中国語を母語とする学習者の日本語談話におけるフィラー ー学習環境による運用上の違いを中心にー
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者が異なる【学習環境】（外国語としての日本語（JFL）環境、第二言語としての日本語（JSL）環境、JFL・JSLを共に経験した混合（M）環境）によって、日本語の自然談話中でフィラーをどのように使用しているのかを多角的に明らかにし、学習環境がその使用に及ぼす影響を解明することである。近年の第二言語習得（SLA）研究では、談話の流暢さや相互行為の調整に関わるフィラーの役割が注目されているが、従来のフィラー研究は主に日本語母語話者を対象としており、学習環境の違いが学習者のフィラーの使用に与える影響を詳細に検討した研究はほとんどない。</p> <p>本研究では、3つの【学習環境】（JFL、JSL、M）にある中国語母語の日本語学習者計15名（各環境5名）と、日本語母語話者計3名（各環境1名）との自然談話（約30分）のデータを収集し、フィラーの形式・出現位置・談話機能という3つの側面から量的・質的に分析を行った。分析を通して、以下の課題を明らかにした（詳しくは第2章の3.2節を参照）。</p> <ul style="list-style-type: none"> (a) 学習環境によるフィラーの形式・出現位置の特徴（第4、5章） (b) 環境間で顕著な差を示す特定のフィラー形式の談話機能の分析（第6章） (c) 学習環境以外の要因がフィラーの使用に与える影響の検討（第7章） <p>論文は序論（第1～3章）、本論（第4～6章）、結論（第7～8章）の三部構成である。序論では、本研究の背景と目的、先行研究の整理、調査のデザインおよび分析方法の概要を示した。第1章では中国語母語話者を対象とする意義を明確にした。第2章では【学習環境】およびフィラーに関する先行研究を整理し、それを踏まえて本研究の課題を提示した。第3章では、調査デザイン、調査対象者、調査資料（音声データ）、分析対象とするフィラーの定義と認定基準、発話単位の設定、信頼性確保のための手続きについて詳細に述べた。</p> <p>続く本論（第4章～第6章）では、学習者のフィラーの使用実態を以下のように分析・考察した。第4章では、フィラーの形式的特徴を頻度・種類・形式の観点から分析した。その結果、【学習環境】によって日本語フィラーの使用頻度には有意な差があり、JSL学習者の使用頻度が最も高く、その次がM学習者で、JFL学習者が最も少なかった。また、使用されるフィラーの種類・形式は環境ごとに偏りが見られ、JFL学習者は中国語の音声型フィラー（「呃(e)」）と日本語の語彙型フィラー（「あの(一)」）、JSL学習者は主に日本語の語彙型フィラー（「なんか」「まあ」「あの(一)」）と音声型フィラー（「え(一)」）を多用していた。M学習者は語彙型フィラー（「なんか」「あの(一)」）と表現型フィラー（「何っていうか」「そうです(ね)」）を多様に使用しており、さらにほかのグループに見られない「こう」という形式の使用まで多く見られ、最も多様な日本語フィラーのバリエーションを持っていた。</p> <p>第5章では、フィラーの出現位置を「①発話文の冒頭」「②発話文の途中」「③発話文の末尾」「④不明」の4つに分類し、さらに①を「①-1自発的開始部」と「①-2返答開始部」、②を「②-1発話中継続部」と「②-2交代後継続部」に細分化した上で、各位置におけるフィラーの使用頻度および形式を【学習環境】別に詳細に検討した。結果、全体として「②発話文の途中」での使用が最も多く、「③発話文の末尾」ではほとんど使用されなかった。「①発話文の冒頭」ではJFL学習者、「②発話文の途中」ではJSL学習者の使用頻度が最も高かった。また、各位置のフィラーについて、JFL学習者は全体を一貫して全ての位置で中国語フィラーの「呃(e)」を多用していたのに対し、JSL学習者とM学習者は主に「①-2返答開始部」を除いて頻繁に使用していた。出現位置によるフィラーの使い分けについては、JSL学習者より、M学習者のほうが顕著であった。これは、M学習者独自の特徴として、JFL環境・JSL環境双方の経験、および高度な実践経験（ゼミナール活動など）を持っていることが影響していると考えられる。</p> <p>第6章では、第4章（形式的特徴）と第5章（出現位置の傾向）の分析結果をもとに、環境差が大きかった「呃(e)」お</p>	

よび「なんか」の2形式に焦点を当て、それらの談話機能を分析・考察した。結果として、JFL学習者は「呃(e)」を語レベルで主に使用しており、「発話の整え」機能が中心であった。また、JSL学習者およびM学習者は「なんか」を「発話の整え」機能で多用していたが、使用傾向には差があった。JSL学習者は語・節レベルで「発話の整え」および「フェイス」の2つの機能を過剰に使用する傾向があったが、M学習者は節・文レベルで多様な機能をバランスよく使用しており、高度な談話能力を示していた。

結論（第7章）では、各章の分析を総合し、【学習環境】がフィラーの使用に及ぼす影響を総括した。JFL・JSL・Mという環境は、使用されるフィラーの頻度・種類・形式だけでなく、談話中の出現位置や機能、さらには学習者の談話能力や社会言語能力の発達にも深く関わっていることが明らかになった。

最後に、最終章（第8章）では、これまでの各章での分析結果・考察を踏まえ、本研究の意義と今後の課題について整理した。本研究は、【学習環境】の違いが中国語を母語とする学習者の日本語談話におけるフィラー使用に及ぼす影響を具体的かつ詳細に示した点で大きな意義を持つ。従来の研究は、主に日本語母語話者との相違や学習者の習熟度に焦点を当ててきたが、本研究は学習歴や滞日歴、日常的な日本語母語話者との接触量・質といった個々の学習者を取り巻く環境要因とフィラーの使用との関係に着目したものであり、学習者のフィラー研究に対して新たな視座を提供している。この知見は、今後の学習者談話研究および日本語教育におけるSLA研究に資するものと期待される。

今後の課題として、まず第一に、従来の「JSL・JFL・M」といった枠組みでは捉えきれないほど、学習者の背景は多様化・複雑化している点が挙げられる。今後は、個々の学習者の学習歴や言語使用環境、さらに言語意識、モチベーション、学習スタイルといった個人要因も精緻に考慮した分析が求められる。

第二に、本研究では主に【学習環境】間で顕著な差が見られたフィラー形式に焦点を当てて考察したが、今後は「あの(一)」や「ん(一)」といった3つの環境に共通して使用されたフィラーに注目し、その出現位置や機能について詳細に分析することで、【学習環境】という要因の影響をより深く理解できると考えられる。

第三に、縦断的な視点から、学習者のフィラーの使用における発達の変化を追跡し、個人内の時間的な変化と環境変化との相互作用を明らかにすることも重要である。

加えて、本研究の結果から、フィラー使用に見られる差異は文法能力やストラテジー能力とも関連している可能性は否定できないが、むしろ談話能力や社会言語能力の違いとより強く結びついていると考えられる点が、今後の重要な検討課題である。本研究では、調査対象者はいずれも日本語能力試験一級（JLPT N1）に合格しており、相当高い文法能力を有しているという前提の下、文の構成や場面に応じたフィラーの適切な選択・運用といった側面に、談話能力や対人配慮に関わる社会言語能力が大きく関与していると解釈した。今後は、これらの能力の発達とフィラー使用との関連性を、学習環境および個人要因の両面から統合的に検討していくことが求められる。

最後に、談話全体の相互行為的側面（例えば、相手の応答やフィードバック）との関係を視野に入れた分析を今後さらに進めることで、フィラーの社会的・相互行為的機能に関する理解が一層深まると期待される。こうした分析は、学習環境の違いが学習者のコミュニケーション能力、特に談話能力や社会言語能力の発達にどのような影響を与えるのかを明らかにする上でも重要な手がかりとなるだろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (冷 羽 涵)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 高木 千恵
	副 査 大阪大学 教授 三宅 知宏
	副 査 奈良大学 教授 渋谷 勝己
	(大阪大学 名誉教授)
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：中国語を母語とする学習者の日本語談話におけるフィラー
—学習環境による運用上の違いを中心に—

学位申請者 冷 羽涵

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 高木 千恵

副査 大阪大学教授 三宅 知宏

副査 奈良大学教授（大阪大学名誉教授）

渋谷 勝己

【論文内容の要旨】

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、学習環境の違いが日本語の習得にどのように影響を与えるかという問題意識のもと、学習者たちの日本語談話に現れるフィラーに注目し、その使用実態と学習環境のかかわりを明らかにすることを試みている。具体的には、学習環境を、①外国語としての日本語（Japanese as a Foreign Language: JFL）環境、②第二言語としての日本語（Japanese as a Second Language: JSL）環境の2つに大別し、JFL 環境下の日本語学習者・JSL 環境下の日本語学習者・その両方の経験をもつ日本語学習者という3つのグループにおけるフィラーの使用実態を記述した。そして、グループ内・グループ間それぞれの共通性・個別性をふまえつつ、日本語談話に現れるフィラーと学習環境のかかわりについて検討している。

本論文は序章を含む9つの章からなる。3部構成をとっており、第1部（序論）では、研究の背景、研究の意義を示したうえで先行研究のレビューを行い、本論文における研究課題と、課題に取り組むための調査概要・分析方法が述べられる（序章、ならびに第1～3章）。第2部が本論であり、談話に現れるフィラーについて、形式的な特徴（第4章）、出現位置にみるグループ間の特徴（第5章）、各グループに特徴的なフィラーの機能分析（第6章）がなされる。最後に第3部（結論）として、日本語学習者のフィラー使用と学習環境に関する総合的な考察と、今後の課題が述べられる（第7・8章）。本文はA4判166ページに及ぶ。

近年の第二言語習得研究では、発話の流暢さや相互行為の調整にかかわるフィラーの役割が注目されているが、教室学習において明示的な指導を受けることがほとんどないフィラーについて、学習者間にみられる運用上の違いを学習環境の違いから解明した研究はほぼみられない。本研究ではこのことをふまえ、JFL・JSL およびその両方（Mixed: M）の環境において日本語を学んできた、中国語を母語とする学習者を対象に、日本語母語話者との自然談話データを収集し、フィラーの形式・出現位置・談話機能という3つの側面から量的・質的に分析を行った。調査協力者はJFL 学習者・JSL 学習者・M 学習者5名ずつ、いずれも日本語能力検定試験（JLPT）N1に合格している。調査協力者と初対面の日本語母語話者との1対1の対面談話を30分程度収録し、分析のための資料とした。

日本語談話に現れるフィラーの頻度に関しては、頻度の低いグループから順に、JFL 学習者<M 学習者<JSL 学

習者となっていた。使用形式にもグループ間で相違がみられ、とくに JFL 学習者において、中国語の音声型フィラー（「呃(e)」）が出現する点が特徴的であった（第 4 章）。また、談話におけるフィラーの出現位置の違いからは、フィラーの運用のあり方が、学習者の談話構成能力の高さ（あるいは低さ）とかかわっていることが示唆された（第 5 章）。そしてフィラーの機能分析からは、JFL 学習者グループの多用する中国語フィラーが発話を整えるために使われるのに対して、JSL・M の各グループにみられるフィラーは、聞き手のフェイス（Face）に対する配慮として使われることが多く、フィラーの運用が談話全体の構成力の高さにつながっていることが明らかとなった（第 6 章）。また、各グループにおけるフィラーの運用の差異は、単に学習環境の違いを反映しているのではなく、各環境下にある学習者たちの言語生活における、日本語が使用されるドメインの違いの現れであることを指摘し、個々人の言語生活や日本語ネットワークについて詳細に分析する必要があることを論じた（第 7・8 章）。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の特色は、高いレベルの日本語能力をもつ上級日本語学習者を対象に、談話に現れるフィラーの運用実態に注目し、学習者の日本語の多様性を「学習環境の違い」「日本語ドメインの違い」という観点から捉えようとしたところにある。調査協力者はいずれも、JLPT におけるもっとも高いレベルである N1 に合格している上級レベルの日本語話者であるが、フィラーの運用においては、JFL・JSL・M というそれぞれの学習環境の違いがはっきりと現れていると本論文は主張する。母国（中国）で日本語を学ぶ JFL 学習者たちが、日本語母語話者との対面談話にもかかわらず中国語フィラーを使用することについて、本論文では、「日本語インプット量の多寡」という環境の違いからの説明を試みている。すなわち、日本での多様なインプットを受ける JSL 学習者や M 学習者とは対照的に、日本語母語話者との接触が少ないことが、日本語フィラーの自然な運用を阻んでいるとする。一方、来日後に日本語を学びはじめた JSL 学習者グループにおいては、使用されるフィラーは「なんか」や「まあ」などいくつかの日本語形式に限られるが、その使用頻度は 3 つのグループの中でもっとも高くなっており、日本語フィラーの過剰使用が示唆される。これに対して、JFL 環境で日本語を学び、その後日本に留学し JSL 環境で生活している M 学習者たちは、JSL 学習者に比べるとフィラーの使用頻度は低いものの、多様な日本語フィラーを使い分けているという。筆者は、こうした学習環境ごとの違いについて、それぞれの言語生活やネットワークに注目し、M 学習者たちが大学のゼミなどフォーマルな日本語を使用する場を多くもつ一方で、JSL 学習者たちはカジュアルな日本語使用の場が中心であると指摘している。つまり、JFL 環境と JSL 環境の両方を経験することそのものがフィラーの自然な習得に適しているのではなく、それぞれの環境に身を置く学習者たちにおける、日本語が使用されるドメインの違いがフィラーの運用のあり方に反映されているということである。このように、学習者のフィラー運用の違いを重層的に捉えることを試みている点に本論文の特色がある。学習者の個別性に注目する近年の第二言語習得研究において、本研究の提供する知見は価値あるものである。

しかしながら、本論文に問題がないわけではない。フィラーの定義や認定基準については、第 3 章において詳細に説明されているが、たとえば「発話全体の意味に影響を与えない」という定義（のひとつ）と、第 6 章で論じられている、「発話の構え」や「フェイス（に対する配慮）」といったフィラーの「機能」との関係については、説明が尽くされていない。また、フィラーの出現位置の違いと談話構成能力との関連性が示唆されているが、実際に談話構成のあり方にグループ間でどのような違いがあったのか、詳細な検討が望まれるところであった。

ただし、こうしたことは本論文の価値を損なうものではなく、むしろ、本研究の発展性を示すものであると考える。残された課題に取り組むことで、第二言語／外国語としての日本語習得研究に新しい知見をもたらすことが期待される。以上から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。